

法華コモンズ通信

法華コモンズ仏教学林事務局

192-0051 東京都八王子市元本郷町 1-1-9 善龍寺内 FAX 番号 ⇒ 042-627-7227

ブログ <https://hokke-commons.jp> / メールアドレス hokkecommons@gmail.com

巻頭言

日蓮仏教の再歴史化を考える

―創価学会の「功罪」について―

法華コモンズ仏教学林 理事長 西山 茂

法華コモンズの目指すところは日蓮仏教の「再歴史化」であるが、これを成し遂げるために避けて通れない関門が日蓮仏教にとっての創価学会の「功罪」であろう。

ではまず、創価学会の「功」について、二つほど語ってみよう。

日蓮仏教にとって創価学会の「功」（こう）の第一のものは、相手が権力をもった官憲であれ、あるいは伝統的な宗教習俗の担い手（庶民）であれ、彼らがとった「謗法」厳戒の「伝統突破」（折伏というブレイク・スルー）の力であろう。もちろん、この裏には、他宗教への悪口雑言や暴力的な神棚撤去等の深刻な人権問題があった。

神宮大麻の受持を強要した官憲に対する創価教育学会の戦中の抵抗については、高橋篤史の『創価学会秘史』（講談社、2018年）に詳しい。澁澤光紀氏は、その書評（『法華仏教研究』第27号、2018年12月、278〜289頁所載）のなかで、この時の牧口常三郎らの官憲への抵抗が「たとえそれが今日の創価学会が自画自讃するような」反戦・平和によるものでなかったとしても、それによって（中略）（牧口らの）獄中の不退転の価値が、下がるものでもない」といって、高く評価している。

なお、東北農村における「折伏大行進」時代における伝統的な宗教習俗への庶民レベルの「伝統突破」については、拙稿「創価学会員の『伝統突破』―二人の女性会員の場合―」（西山茂編『仏教系新宗教教団における教導システムの比較研究（3）』、2004年、東洋大学社会学部西山研究室、53〜61頁所載）を参照されたい。

創価学会の第二の「功」は、日蓮仏教の三大秘法のひとつである「本門戒壇」の建立を戦後期の日本の時空のなかに具体的に運動化したことである。すなわち、大まかにいって、創価学会は、1951年（第2代会長に戸田城聖が就任）から1970年（政教分離を宣言）までは「国立戒壇」建立の旗を公的には降ろさず、それ以降1972年（正本堂の完成）までは「民衆立」の「本門戒壇」（＝正本堂）の建立運動を担ったことである。



川崎弘志先生



上杉清文先生



菅野博史先生



大平宏龍先生

（講義の様子）

だが、政教分離と信教自由を認める戦後の憲法体制のもとでの「国立戒壇」の建立は、所詮、無理だったようで、やがて、創価学会の「国立戒壇」論の放棄と正本堂Ⅱ「民衆立」の「本門戒壇」説を1970年5月の段階で社会的に公言することになる。

この「国立戒壇」建立運動の失敗は、政教分離と信教自由の体制下に生きるわれわれに対して、「本門戒壇」とは何かという根本的な問題を突き付けるものである。

20年以上にわたる創価学会の「本門戒壇」建立運動は、結果として、相対的不満から現状打破を求める高度経済成長下の「都市下層」(鈴木広)庶民の大量動員に成功して、教団はまたたく間に急膨張を遂げた。

創価学会の「本門戒壇」建立運動については、拙著『近現代日本の法華運動』(2016年、春秋社)の第9章「戦後創価学会における『本門戒壇論』の変遷―政治的宗教運動と社会統制―」(233～268頁所載)や、本化ネットワーク叢書(3)『本門戒壇論の展開』(2015年、本化ネットワークセンター)の



西山 茂 先生

第6章の中
野毅「戦後
民主主義と
創価学会の
戒壇建立運
動」(148
～179頁
所載)を参
照されたい。

それでは、創価学会の「罪」(ざい)とは何であろうか。マスコミが取り上げる世俗的な「罪」には種々あるだろうが、ここでは唯一、宗教運動論的にみた創価学会の「罪」のみを取り上げてみたい。それは、「本尊や中心的な教義を劇的に変えても、その参加者(会員)をあまり減らさないのは何故なのか」(『宗教と社会』第24号156頁所載の拙著の『近現代日本の法華運動』の書評のリプライ中の拙語、2018年、「宗教と社会」学会)ということである。

これは主として2014年11月に大石寺の戒壇本尊を会員の受持の対象から外すと決めた同会の会則変更のことを指しているが、これまでの創価学会はこの戒壇本尊を世に出すために「本門戒壇」の建立運動を展開してきたのではなかったのか。

転進する時には過去を総括すべきなのに、残念ながら創価学会にはそれが無い。過去と現在の教団の自語相違には一向に無頓着なようである。これでは、宗教間対話を求めても、相手から信頼されないであろう。このように考えると、これが創価学会の最大の「罪」なのかも知れない。

加えて、かつては「民衆の友」・「平和の砦」として支持者の生活の底上げのために尽力したことのある公明党(実体的には創価学会と双頭の鷲)も、今では政権与党として集団的自衛権に踏み込んで賛成し、沖縄県知事選では辺野古基地建設に反対する玉城氏の対立候補を推して敗れるなど、その変貌ぶりが著しい。これでは、公明党の立党の原点や日蓮仏教の理想に照らして、それらに適ったものかどうかという疑問が出てくるであろう。

(結)

講義報告

法華仏教講座について

報告 武川清明

法華仏教講座は、全6回それぞれに各方面で碩学の講師をお招きして、異なる講義をして頂くという方式です。

第1回は川崎弘志先生による「日蓮と密教」『不動・愛染感見記』を中心に」。最初に『不動・愛染感見記』について、1968年の近藤善博先生による『不動・愛染感見記』の紹介から、現在までの研究発表の概要を解説して頂きました。

川崎先生は特に『不動・愛染感見記』と日蝕の関係性に注目して愛染明王の図画の模様が、皆既日食時に見られるプロミネンスを表しているのではないかと、また日蓮本人が皆既日食を見る機会があったのか、当時の天文状況を調査した結果、建長元年(一二四九)4月1日に高野山で皆既日食が観測できたこと、当時日蓮が高野山にいた可能性があることを示して頂きました。

その後、『不動・愛染感見記』を真筆・偽筆であるとする論拠の紹介や、他の日蓮遺文との文字体の比較、不動明王の図絵の描き方を指定する文書が当時あったことを提示して『不動・愛染感見記』はやはり日蓮真筆であるとの結論を示されました。

第2回は上杉清文先生の『蓮密』をめぐる諸考察。上杉先生は演劇出身という異色の経歴にふさわしく、

最初に「先日、曹洞宗僧侶の著書に紹介文を書いてくれと頼まれたので、全然関係ないことを書いて送ったら没になった。著書は読めば内容がわかるのだから本の内容を紹介文として書く意味はない」と言い放ち聴講生一同を哑然とさせた後で、蓮密、本覚、大楽、東密、台密、狂言といったテーマで講義を進められました。特に真言立川流については、邪教とみなされたため関連する文書が焼かれてしまい、真言立川流を邪教とする立場の資料から教義や活動を推測するしかないという、研究の難しさについて言及しながらも、真言系の両部的（男女和合的）な思想や、特異な髑髏本尊の作成方法とその意義についても語って頂きました。

最後に上杉先生は自問自答という言葉を使われていましたが、膨大な書籍や資料を参照していることがレジュメからわかる他、その内容をどのように咀嚼すべきか、どのような観点で捉えれば新しい知見と成り得るか、悪く言えばいかに面白く解釈できるか、ということを中心に自問自答していることが窺われる、上杉先生のお人柄に触れることもできた講義でした。

第3回は花野充道先生「日蓮聖人の本仏論は仏教に非ざる基体説か」。まず花野先生は「天台本覚思想」という言葉について、智顗の著作には「本覚」という用語は使われておらず、「本覚」の用語と思想が見えるのは『大乘起信論』であるとした上で、『大乘起信論』の本覚思想は如来藏思想、天台教学の本覚思想は大乗空思想に立脚しており、両者の違いは本有常住、遍一切処の法身に智を認めるか否かにある、

と解説して頂きました。

花野先生は『大乘起信論』のほか『摩訶止観』『金光明經玄義』『法華玄義』の内容を参照しつつ、『大乘起信論』で語られる法身は理智一体の「本覚の法身」であり、天台においては智を含まない「本理の法身」であることを解説し、『大乘起信論』に書かれている思想と智顗教学の思想の違いを明確にして頂きました。

その後、日蓮の本迹勝劣思想は智顗の本迹不思議一思想とは対立構造にあること。日蓮仏教は基体説であるがゆえに本仏・本尊を立て、智顗の大乗空思想では本仏と迹仏は不思議一・己心を観じて円融相即の実相理の証得を目指す、という違いを花野先生の仮説として示して頂きました。

最後に正信会や興風談所、日蓮正宗などの教団や研究者間の議論・論争について解説して頂き、今後はこれまでの閉じた議論ではなく、より開かれた議論を通じて教学を深めなければならない、と問題提起して頂きました。

このように法華仏教講座は各回が広い知見に基づいた特徴ある講義となっています。残り回数も少なくなりましたが皆様のご聴講をお待ちしております。



花野充道 先生

講義報告

歴史から考える日本仏教② 菊地大樹 先生

《顕密問題》を考える

報告 布施義高

法華コモンズ仏教学林では、菊地大樹先生に、平成二十九年年度後期講座から連続三期で貴重な講座を担当して頂いている。

平成二十九年年度後期が『吾妻鏡』と鎌倉仏教（全六回）、平成三十年年度の前期「歴史から考える日本仏教―鎌倉時代を射程に入れて」（全六回）、そして、後期「歴史から考える日本仏教②《顕密問題》を考える」（全六回、現在開講中）である。

菊地大樹先生（文学博士（東京大学））は現在、東京大学史料編纂所で准教授をお勤めになる、日本中世史・仏教史研究の正しくその学術的な頂きで活躍される碩学である。

菊地先生は毎回、法華コモンズ仏教学林の目的や受講者のレベルを見据えられながら、日蓮仏教を多角的に読み解くための学徒垂涎の視点を供して下さっている。時に、『吾妻鏡』や諸資料を駆使し、鎌倉時代の歴史的、宗教史的、文化史的特徴を、時に、山の宗教にスポットを当てて日本伝統の宗教の深層を確認ないし再発見されながら、明快かつ理路整然と展開される講義は圧巻であり、各回の講義は都度書籍化されてよい程に内容が濃密である。

今回の講座では、日本仏教における「顕密」の問

題を中心に、日蓮聖人当時の様相を射程に入れ、広く日本仏教全体を読み解き直される壮大なスケールで講義が進行している。

テーマ選定の背景には、近時、既知の文献の再検討や、新発見の文書聖教類の検討も加わり、日蓮聖人を含めた鎌倉時代、延いては日本仏教史全般のダイナミズムを捉え直す気運が高まりを見せていることがある。

曾て黒田俊雄博士が日本中世史を読み解く鍵として提唱された顕密体制論は学界にセンセーショナルなインパクトを与え、反的にも、その後の研究に甚大な影響を与え今日に至っている。それは、中世日本を「顕密体制」を主軸に展開した時代と規定するもので、従前の新仏教中心の鎌倉仏教史観に根本から転換を迫った所論であった。

本講座では、かかる問題が今日の学問の最前線ヴェルで如何に捉えられるべきかの微細な解説、そして、菊地先生ご自身による密教そのものの特性の再吟味、そして、顕教との関係性の再確認を行われながら、日本仏教史全体の中の「顕密」の意味を根本から精査し直されている。今後の先生の学術的アウトプットのご予定をも考え、ここでは具な内容紹介に立ち入らないことをご容赦頂きたいが、ともかく、その取り扱われている資料は毎度膨大で、それらを微細に解析され、要点を纏められながら、今日的に正確な歴史を描くための全体的な見通しを提示して下さっているのである。

それ故に、先生の講義では、各回、主要テーマの概説を中心としつつ、必要に応じ、あるいは従来の



菊地大樹 先生

見方が修正されるべきことなどを示す際に、核心となる資料を丁寧に解説して下さい。そのことにより、本講義では、プロフェッショナルが史料の紙背にさえ徹しながら歴史の深層を探る姿にも直接触れることができる。そう考えると、本講座は、斯界の未来の担い手にとっても、理想的な史料読解法の範に触れることができるという、特典付きの講座になっていると言って良い。

今回の講座では、特に、思想的な側面からも日本仏教史の深部を読み解いて下さっており、歴史研究者の立場から織り成される教理史解説の迫力に圧倒され、感銘を受けた受講者が多いであろう。

菊地先生の講座は、日蓮仏教ないし日本仏教全般への本格的な学習を求める一般聴講者とはもとより、仏教教団各宗や日蓮門下各門流の指導者、そして、各大学・大学院の学徒に広く受講をお勧めしたいと思う。受講により、必ずや視界が大きく開けるであろう。

法華コモンズ仏教学林が誇る代表的講座の一つが、菊地大樹先生の講座である。

特別集中講座報告

渡邊寶陽先生

第一講 「日蓮聖人の地獄観」

第二講 「『観心本尊抄』 讃仰」

報告 運営スタッフ

第一講 「日蓮聖人の地獄観」の報告

去る一月二十四日(土)午後三時より、特別集中講座第一講として、渡邊寶陽先生の「日蓮聖人の地獄観」が多くの聴衆を集めて開講されました。講義は、今から四二年前の昭和五十一年に発刊された論考集『地獄と人間』(朝日新聞社)に掲載されたご自身の論考「日蓮聖人の地獄観」を取り上げて、当時の社会状況などテーマの背景を説明しながら、日蓮聖人の教学にとって如何にその「地獄観」が本質的なものであったかを、二時間にわたって詳しく解き明かして頂きました。

論考「日蓮聖人の地獄観」は、朝日カルチャーセンターが昭和五〇年に開催した講座「地獄の思想」(全一三回)での講義の速記録を加筆編集したものです。渡邊先生がこのテーマを話すことになったのは、『苦海浄土』を書いた石牟礼道子氏に刺激された丸山照雄氏から要請されたからだそうです。水俣病公害という「この世の地獄」を描いた石牟礼道子氏は、今年の二月に帰寂されています。四二年ぶりにその当時の「地獄」を思い出させたこの講義は、期せずして石牟礼道子氏への追悼にもなっていたと思

います。

講義では、まず地獄について明治・昭和期の真宗の学者・山辺習学氏に『地獄の話』（昭和七年刊、講談社学術文庫）があると紹介、真宗では逆に「極楽往生とは何か？」という形で大問題ともなったこの話をされました。確かに「地獄」の現実味がなくなれば、その対極の「極楽」の实在も怪しくなっていくわけです。

日本仏教における代表的な地獄の思想といえば、恵心僧都源信の『往生要集』が大きな影響を与えたとのことで、日蓮聖人も『顕謗法鈔』での地獄の描写でわかるようにこの『往生要集』を深く学びます。

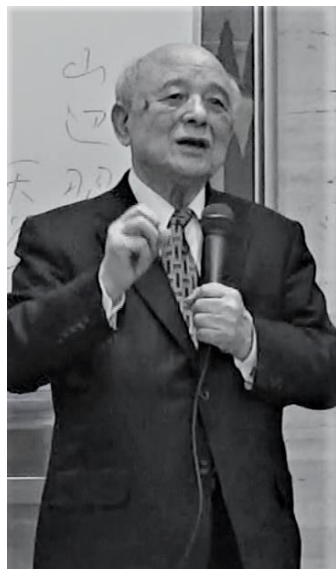
しかし日蓮聖人は、源信の描いた「あの世の地獄」だけでなく、『立正安国論』の冒頭にあるように「この世の地獄」を大きく問題にしたことを、渡邊先生は指摘します。日蓮聖人によれば、あの世の地獄もこの世の地獄もともに、正法を蔑ろにした謗法の罪によって実現してしまう現実なのです。

ではどのようにしてこの末法の時代に、この現世と来世との地獄をともに避けていくことができるのか。その唯一の方法として日蓮聖人が示されたのが、教主釈尊の大慈悲としての「五字七字のお題目」であり、その功德によって私たちは「無間地獄の道をふさぎ」「三界はみな仏国なり」としていける、ということなのです。

そして講義の「むすび」として、渡邊先生は「要するに、『報恩抄』における無間地獄への道を塞ぐということ、それが現状の認識と重なって日蓮の宗教・教説というのは語られている」のであり、「地獄とか

浄土とかいうことは、単に死後の行く末ということではなくて、結局、人間の宗教的絶対世界への安住の問題」で、「日蓮の宗教の内実的な面の基底となっていたものが日蓮の地獄観であろう」と語って講義を終えられました。

今回の講義は、日蓮聖人の教学のその核心部分に、謗法罪と分かちがたくむすびついた「日蓮聖人の地獄観」があったことを、あらためて深く認識させてくれました。その後の質疑応答も熱心に行われて、大変充実した第一回の集中講義となりました。



渡邊寶陽 先生

第二講『観心本尊抄』讃仰』報告

平成三〇年一二月八日（土）、渡邊寶陽先生の特別集中講座第二講『観心本尊抄』讃仰』が開講された。今回も日蓮教学研究界の重鎮の登壇とあって、諸教団の研究者から生徒まで多くの聴衆が駆けつけ盛会となった。

この渡邊先生第二講では、日蓮聖人の御遺文中、最高峰に位置づけられる『如来滅後五百歲始観心本尊抄』（以下、『観心本尊抄』と略称）について、その最も中心となる第二〇番答の本尊段を集中的に

ご講義頂いた。

今回の講義では、受講者用テキストとして、先生が著された『國寶『観心本尊抄』讃仰』（山喜房仏書林、二〇一三）の二〇六―二二七頁コピーが配布された。同書は、『御真蹟原文（御真蹟影印）』『釈文（昭和定本日蓮聖人遺文）の解説文』『読み下し（白文書き下し文）』『大意』『讃仰』と章節毎に読み進めることができる、初学者にも研究者にも非常に便利で、内容的にも極めて優れた書籍である。

本講では、テキストに基づきながら、明快に日蓮教学の根幹についての解説がなされた。特にその周辺事項や、渡邊先生ご自身の歩みの回顧録を交え、充実した二時間が瞬く間に経過した。

先生は『観心本尊抄』を観心段・本尊段・弘通段に分け、第二〇番答の中程から始まる【本尊段】を「それ寂滅道場華藏世界……」の説示から丁寧な解説して行かれた。そして、「今、本時の娑婆世界は、三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり。仏既に過去にも滅せず、未来にも生ぜず。所化以て同体なり。此れ即ち己心の三千具足三種の世間なり」という有名ないわゆる「四十五字」が、爾前經と法華經迹門で明かされる、三災を伴う四劫の無常性から免れ得ない仏身・仏土の世界を超えた、真の常住の世界であり、これが本門の発迹顕本によって表され、行者（末法題目受持者）の信行世界に活現すると明かされること、すなわち、題目受持の当処「己心三千具足三種世間」と現成するところに本門法華經の特徴があることを明快にご講義くださった。

引き続き、渡邊先生は、『観心本尊抄』【本尊段】

のその後展開される題目の本化への付嘱、本尊の相貌など、日蓮聖人の真意を原文忠実に解説してくださった。

また、講義の中で、渡邊先生は、今日的な視点として、天台大師が『摩訶止観』巻第五第七正修正観章で一念三千を開陳されるまでの天台哲学深化の様相や瞑想修行の階梯、あるいは、天台教学研究の泰斗・安藤俊雄博士が指摘した天台教学における法華円教理論の枢要である敵対（じやくたい）的相即の論理などに注目していくべきこと、更に、「四十五字」を読み解く際の文中「本時」の重要性に今日あらためて注目すべきことなど、重要なポイントをご教授くださった。殊に、題目を単に五字ではなく五字・七字と示された日蓮聖人の深意を汲み取るべきことの重要性、題目が静止的な教えではなく、躍動的で、末法の衆生を救済する能動性を有することを強調されていたことは印象的であった。

講義終了後の質疑応答では、かつて教学界を賑わせ今日も高い関心が持たれている、山川智応・清水龍山両先生の間で論争された『観心本尊抄』「四十五字」文中の「己心」の解釈をめぐる、渡邊先生のご所見をご教示頂いた。渡邊先生は往時の大学内の様子をも直接見聞されている数少ない先生のお一人でもあり、興味深いお話を伺うことができた。

二回にわたる講義は、何れも内容的に刺激に満ちたご講義であった。

全体を通して、日蓮聖人研究の第一人者として長年斯界を牽引されてきた渡邊先生のオーラと凄みを眼前で感じることができ、受講者全員にとって大変

幸せな時間であったと思う。

渡邊先生には、心より感謝申し上げる次第です。誠に有難うございました。

受講生の声

講義を受けての感想

受講生 松永 良樹

私は現在、菅野博史先生の「『法華経』と『法華文句』」、菊地大樹先生の「歴史から考える日本仏教」頭密問題を考える」」、六人の講師先生による「法華仏教講座」を聴講しております。

また、以前にも布施義高学林長のご講義をはじめ、多くの貴重なご講義を拝聴させて頂きました。

法華コモンズでは、法華経や日蓮聖人の思想を専門的にしたものは勿論のこと、初期仏教やサンスクリット原典など幅広い仏教学的知見、宗教学や歴史学など、様々な立場・角度からのご講義を受けることができます。講師の先生方はみな第一線で活躍されている方々であり、最先端の研究や、現場での裏話、また研究に対する姿勢や方法論などについても言及され、毎回目から鱗が落ちる思いであります。

私は、研究という環境に身を置いておらず、学びが捗らない事も多々ございます。そういった中、法華コモンズでは、独学ではなかなか至る事が出来ない、広く深い領域に触れることができ、私にとって貴重な場所であると感じております。

日常生活を送る中で、学問と現実との間にある隔たりや、学問と信仰との関係に悩む事もございますが、法華コモンズでの先生方のお考えや体系化された講義を通して、学問は、それによって自己を俯瞰的に捉え、信仰をより深いところで考えるためのものでもあり、現実を受け止める観方を身につけるうえでも必要不可欠なものである、と教えて頂く事ができました。

聴講者は、門流の隔てなく多方面にわたっており、開かれた学びの場を象徴しているように感じます。講義の会場では、真剣に聴講されているみなさまの空気を肌で感じる事ができ、自分自身の向上心に刺激を頂いております。

また、講義後の質疑応答の時間には非常に鋭い質問が飛び交い、時に侃々諤々と議論しあうわけではありますが、みなさま「日蓮門下」という共通の意識を持つておられ、確執が生じることはなく、非常に建設的で切磋琢磨した議論となります。その議論も法華コモンズの醍醐味の一つであるように思います。これから受講される方も、是非この空気に触れて頂ければきっと得るものは大きいのではないかと思います。

最後に、講師の先生方やスタッフの皆様には、素晴らしい学びの場をご提供頂き、感謝申し上げます。個人的には、仏教を学ぶ上で重要な「空」の思想について取り上げて頂く事があれば是非拝聴させて頂きたい思います。機会がございましたら是非宜しくお願い致します。

【法華コモンズ仏教学林 平成31年度前期講座の一覧】

会 場：新宿常円寺「祖師堂地階ホール」新宿区西新宿 7-12-5 寺務所 ☎03（3371）1797

受講料：1 期分 6 回講義 12,000 円、4 回講義 10,000 円 ※1 回のみ聴講は 3,000 円

「『観心本尊抄』拝読」

講師 都守基一 先生

※前期講座① 6 回講義 原則 第 2 土曜日（7 月、8 月は別） 午後 4 時 00 分～6 時 00 分

第 1 講	述作由来と大意	4 月 13 日
第 2 講	書誌と末註	5 月 11 日
第 3 講	題号と撰号	6 月 8 日
第 4 講	題目段の拝読	7 月 6 日
第 5 講	本尊段の拝読	8 月 3 日
第 6 講	流通段の拝読	9 月 14 日

「仏教説話の世界」

講師 岡田文弘 先生

※前期講座② 4 回講義 原則 第 2 土曜日（7 月は別） 午後 6 時 45 分～8 時 45 分

第 1 講	仏教説話の発生	4 月 13 日
第 2 講	説話文献編纂の黄金期と恵心僧都源信	5 月 11 日
第 3 講	鎮源『法華験記』の世界	6 月 8 日
第 4 講	日蓮聖人と説話	7 月 6 日

「歴史から考える日本仏教③ 日本宗教史の名著を読む」講師 菊地大樹 先生

※前期講座③ 6 回講義 原則 第 3 火曜日（7 月は別） 午後 6 時 30 分～8 時 30 分

第 1 講	大隅和雄「古代末期における価値観の変動」を読む	4 月 16 日
第 2 講	高木 豊「持経者の宗教活動」を読む	5 月 21 日
第 3 講	黒田俊雄「日本宗教史上の「神道」」を読む	6 月 18 日
第 4 講	ルチア・ドルチェ「二元的原理の儀礼化」を読む	7 月 23 日
第 5 講	西村 玲「教学の進展と仏教改革運動」を読む	8 月 20 日
第 6 講	ジェームズ・ケテラー「バベルの再召－東方仏教と 1893 年万国宗教大会－」を読む	9 月 17 日

「『法華経』『法華文句』講義」

講師 菅野博史 先生

※前期講義④ 原則 第 4 月曜日（7 月、9 月、10 月、2 月、3 月は別） 午後 6 時 30 分～8 時 30 分

第 1 回	4 月 22 日	第 5 回	8 月 26 日	第 9 回	12 月 23 日
第 2 回	5 月 27 日	第 6 回	9 月 30 日	第 10 回	1 月 27 日
第 3 回	6 月 24 日	第 7 回	10 月 21 日	第 11 回	2 月 17 日
第 4 回	7 月 29 日	第 8 回	11 月 25 日	第 12 回	3 月 30 日

《受講申込み》 メールアドレス ⇒ hokkecommons@gmail.com

FAX ⇒ 042-627-7227 / ブログ ⇒ <https://hokke-commons.jp>

賛助会員一覧

(敬称略)

個人会員

※1口 一万円

6口	柴山 信行	1口	澁澤 光紀
6口	持田 貫信	1口	菊地 大樹
6口	佐古 弘純	1口	藤本 坦孝
3口	竹内 敬雅	1口	丁田 泰昌
3口	村上 東俊	1口	西山 英仁
2口	鈴木 正厳	1口	松本 史朗
2口	間宮 啓壬	1口	長谷川正浩
2口	菅野 博史	1口	中野 顕昭
1口	佛立研究所	1口	匿名希望

法人会員

※1口 五万円

2口	光厳寺	2口	善龍寺
2口	本國寺	2口	持法寺
2口	公益財団法人 東洋哲学研究所		
1口	顕本法華宗 経胤寺		
1口	摩耶寺		
1口	天龍寺		

(以上)

※ご協力の皆様には心より感謝申し上げます

年間賛助会員加入のお願い

法華コモンズ仏教学林では、本学林の趣旨に賛同して運営の維持に協力して頂ける「年間会員」を新学期時に募集しています。左記の要領にて、受付けておりますのでぜひご協力のほどお願いいたします。

【年間賛助会員 加入申込みについて】

- 個人会員 — 年間1口(1万円)
- 法人・団体会員—年間1口(5万円)

《お申込み年度の特典》として

- 1、個人会員で6口以上の方には、会員のみ使える年間フリーパス受講証を差し上げます
- 2、法人・団体会員では2口で、誰でも使える年間フリーパス受講証を差し上げます

※「年間フリーパス受講証」は、開設の全ての講座を一年間全て受講することができます。年間で6つの連続講座を受講した場合、受講料は七万二千元(一講座一万二千元×6)です。で、大変お得です。

●申込み頂ける方は、右の内容を書いて、表紙タイトルまた8頁下記載のメールアドレス、ファックス、ブログからお申し込み下さい。

★ 個人が法人か、また何口かを明記

★ 名前、年齢、住所、電話、ファックスまたメールアドレスを明記

「講座映像版」販売のお知らせ

待望されていた法華コモンズ仏教学林の誇る講師陣の講義記録映像が、ついに販売開始されます。

その第一弾として平成二九年後期に開講された6回講座、菊地大樹先生の「吾妻鏡」と鎌倉仏教」をお届けします。

この講座映像は、次のとおり「ダウンロード版」と「DVD版」の二通りの方法で購入できます。

◎ダウンロード版：価格12,000円(消費税込)

全6回講義の動画ファイルとレジューメPDF

◎DVD版：価格12,500円(消費税・送料込)

全6回講義のDVD6枚組とレジューメ印刷物

この詳細につきましては、法華コモンズのブログ(<https://hoke-commons.jp>)をう参照ください。ご購入は、ブログまたは開講時の受付にてお申し込み下さい。

『法華コモンズ通信』第2号

○発行日ー 平成三一年二月一日

○編集発行ー法華コモンズ仏教学林

○発行所ー 法華コモンズ仏教学林 事務局

一九二〇〇五一 東京都八王子市元本郷町一〇一九

Fax 〇四二一六二七二二七